高２国語
オンライン授業の実施について

受講生の皆様

　いつもお世話になっております。さて、4 月 17 日より KOMABA でのオンライン授業が始まり、また早稲田渋谷シンガポール校（以下、早稲渋）でも同様に ZOOM を用いたオンライン授業が始まりました。多くの方にとってオンラインでの受講は初めての形式であり、学習に関して手探りの部分もあるかと思いますが、KOMABA ではできる限り、皆さんの自宅学習のサポートをしていければと思います。どうぞ今後ともよろしくお願いいたします。

担当　川口

2020 年 4 月 22 日

　なお、オンラインでの授業実施にあたり、「高２国語」では講義形式でノートを取りながらの授業を行う予定でございます。そのため、授業前には以下のご準備をお願いいたします。また、教材については早稲渋の実際の授業の進め方にあわせて内容を調整したいと思います。事前に PDF などで準備が必要な場合には、生徒に直接連絡します。

【授業で使用するもの】

筆記用具，ノート等（書き込みができるもの），

PDF 教材（※必要な場合には別途指示）

助動詞（1）

基礎学習

I 助動詞の接続と活用

野球やサッカーなどのスポーツを観戦するときに、メンバー表とポジションがわからないと見ていても面白くありませんよね。一人一人の選手の区別がつかないからです。助動詞の学習も同じです。助動詞には、同じような形の語がたくさん出てきます。これを一つ一つ区別できなくては、古文は読解できませんし、当然面白くもありません。そして、一つ一つの助動詞を区別するのに絶対必要なのが、**助動詞の接続と活用**の知識です。メンバー表やポジションのようなものだと思って、早めに覚えてしまいましょう。主要な助動詞は二十八語あります。

助動詞の接続とは、**各助動詞の上の語**の活用形のことです。助動詞は、それぞれ自分が接続する相手を決めています。例えば、〈打消〉の助動詞「ず」は未然形にしか接続しませんし、〈過去〉の助動詞「けり」は連用形にしか接続しません。助動詞の学習は、まず、この接続を覚えることから始めましょう。

未然形接続	る・らる・す・さす・しむ・ず・じ・む・むず・まし・まほし（11語）
連用形接続	つ・ぬ・たり〈完了〉・けり・き・けむ・たし（7語）
終止形接続	らむ・らし・べし・まじ・めり・なり〈伝聞・推定〉（6語）
体言または連体形接続	なり〈断定〉・たり〈断定〉・ごとし
サ未四已接続	り

問 四段活用動詞「咲く」に次の助動詞を接続させると、どのような形になるか。(例)にならって答えよ。

(例) ず（ 咲かず ）
(1) ぬ（　　）　(2) めり（　　）
(3) む（　　）　(4) ごとし（　　）

▼**終止形接続**の助動詞は、**ラ変にだけは特別に連体形に接続する**ので、そのことも覚えておこう。

▼「**サ未四已接続**」とは、**サ変動詞の未然形または四段動詞の已然形に接続する**ということ。「り」という助動詞は、このように非常に特殊な接続をするので注意しよう。「サ未四已」で〝サミシイ〟と読み、「〝サミシイ〟〈完了〉の『り』」と覚えておこう。

問 解答
(1) 咲きぬ　(2) 咲くめり
(3) 咲かむ　(4) 咲くごとし

次に**助動詞の活用の仕方**を覚えましょう。助動詞の活用は、主要助動詞二十八語の活用表をすべて暗唱してもよいのですが、それは、少し大変です。ほとんどの助動詞は、用言のいずれかとほぼ同じ活用をしますから、何と同じタイプかを分類して覚えてしまえば、一つ一つの活用表は暗唱せずにすみます。活用のタイプで分類してみますので、覚えてください。

特殊型	ず・き・まし	**無変化型**	らし・じ
ラ変型	たり〈完了〉・なり〈伝聞・推定〉・めり・けり・り・たり〈断定〉・なり〈断定〉		
形容詞型	べし・まじ・まほし・たし・ごとし		
四段型	む・らむ・けむ	**サ変型** むず	**ナ変型** ぬ
下二段型	る・らる・す・さす・しむ・つ		

問 次の助動詞を、(例)にならって〈 〉内の指示に従って活用した形を答えよ。

(例) めり〈連体形〉（ める ）
(1) べし〈已然形〉（　　）　(2) けむ〈連体形〉（　　）
(3) ぬ〈連用形〉（　　）　(4) つ〈未然形〉（　　）
(5) むず〈連体形〉（　　）　(6) らる〈已然形〉（　　）

接続と活用を一通り覚えたら、次に、各助動詞の意味や用法の詳細を勉強しましょう。

Ⅱ 〈打消〉の助動詞「ず」

【活用】 **特殊型**なので、しっかり覚えておきましょう。形容詞とちょっと似ています。

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	
ず	(ず)	ず	ず	ぬ	ね	○	基本活用
	ざら	ざり	○	ざる	ざれ	ざれ	補助活用

▼助動詞の活用の覚え方は、
①特殊型と無変化型をまず覚える。特に特殊型は、一つ一つの活用表をしっかり暗唱すること。
②①の助動詞以外は、
「〜り」➡ラ変型
「〜し」「〜じ」➡形容詞型
「む・らむ・けむ」➡四段型
「むず」➡サ変型
「ぬ」➡ナ変型
のように整理して覚える。
③①②以外の助動詞が出てきたら、すべて下二段型。

問 解答
(1) べけれ　(2) けむ　(3) に
(4) て　(5) むずる　(6) らるれ

▼「ず」の活用は、形容詞と同じようにできたものと考えられる。補助活用の役割も形容詞と同様、主に助動詞を接続するためと考えればよい。基本活用の未然形「(ず)」に関しても、形容詞と全く同様である。

【接続】「ず」は未然形接続です。

【意味】〈打消〉 ～シナイ

III 〈過去〉の助動詞「き」「けり」

【活用】「き」は特殊型、しっかり暗唱しましょう。「けり」はラ変型です。

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
き	せ	○	き	し	しか	○
けり	（けら）	○	けり	ける	けれ	○

【接続】「き」「けり」とも連用形接続です。

【意味】a 〈過去〉 ～シタ

ただし、「き」と「けり」の間には、

き……話者の直接体験の過去

けり……伝聞的過去

という相違点があります。

b 〈詠嘆〉の「けり」 ～ダッタノダ・～ダナア

過去から続いてきたことに、今初めて気づいた驚きを表します。別名〈気づき〉の「けり」。

問 次の文中から、助動詞「ず」「き」「けり」をそのまま抜き出し、文中での活用形を答えよ。

(1) 花なむ咲かぬ。 （　・　）

(2) 花こそ咲きしか。 （　・　）

(3) 花ぞ咲きける。 （　・　）

▼「き」の未然形「せ」は、「せば」という形でしか出てこない。また、「けり」の未然形「けら」は、上代にのみ用例が見られる。

▼活用表中の「○」は、その活用形の用例が存在しないことを示している。「○」の位置については、あまり神経質にならなくてもよい。

▼「話者の直接体験」というのは、話し手が直接自分で体験したこと、あるいは目撃したことという意味。したがって、話者が動作の主体にならなくても、話者がその場で見聞きしたことに対しては、「き」を用いることができる。

▼「き」と「けり」は、現代語に訳すときには同じと考えてよい。

▼〈詠嘆〉の「けり」は、あることに気づいた驚きを表すが、このような場合、現代語では、「～ダッタ・～ダッタノダ」という表現をすることがある。「あっ、明日は試験だった」などというのがそれ。「～ダッタ」と言うと過去の表現のようだが、〈詠嘆〉の「けり」の訳語としてかまわないのである。

問 解答

(1) ぬ・連体形　(2) しか・已然形

(3) ける・連体形

文法チェックテスト

1 次の文中の傍線部は、「動詞＋助動詞」の組み合わせである。(例)にならって、①動詞の活用形を答え、②助動詞を終止形に直して答えよ。

(例) 花ぞ咲きける。　（①連用形　・②けり）

(1) 稲荷に思ひおこして詣でたるに、……。　（①　・②　）

(2) 巳の時ばかりに成りにけり。　（①　・②　）

(3) ただなる所には目にも止まるまじきに、……。　（①　・②　）

(4) あはれなる人を見つるかな。　（①　・②　）

(5) この君よりほかに、まさるべき人やはある。　（①　・②　）

2 次の文中から、(例)にならって助動詞「ず」「き」「けり」をそのまま抜き出し、文中での活用形と、ここでの意味を答えよ。

(例) 花ぞ咲きける。　（ける　・　連体形　・　過去）

(1) 九重(ここのへ)のうちに鳴かぬぞ、いとわろき。　（　・　・　）

(2) 下り行きしこそ、……これが身にただ今ならばやとおぼえしか。　（　・　・　）　（　・　・　）

(3) 月のいとはなやかにさし出でたるに、「今宵は十五夜なりけり」と思し出でて、……。　（　・　・　）

(4) 春の野に若菜摘まむと来しものを散り交ふ花に道はまどひぬ。　（　・　・　）　（　・　・　）

1

出典

(1)(2)(3)『枕草子』(第4講問題演習参照)

(4)(5)『源氏物語』

ヒント

助動詞の接続と活用を思い出すこと。解法の手順としては、

①動詞の活用の種類を割り出して、活用形を考える。

②動詞の活用形がある程度しぼれたら、その活用形に接続する助動詞をすべて挙げてみて、その活用のタイプを吟味し、助動詞を決定。

例えば、(1)の場合、動詞「詣づ」は、下二段活用動詞だから、「詣で」は未然形か連用形である。あとは、未然形接続と連用形接続の助動詞を思い出して、その中から候補をしぼっていく。

2

出典

(1)(2)『枕草子』(2)は第4講問題演習参照)

(3)『源氏物語』　(4)『古今和歌集』

ヒント

(3)「今宵は」とあることに注意。

(4)助動詞「き」はカ変動詞に接続する場合、特殊な接続になる。「こし」「こしか」と未然形に接続することができるのである。

次は『土佐日記』の一節で、作者一行の乗った船が室津（むろつ）の港で、悪天候のため出港できずにいるときのことを記したものである。

二十日（はつか）。昨日のやうなれば、船出ださず。みな人々憂（うれ）へ嘆く。苦しく心もとなければ、ただ、日の経ぬる数を、「今日いく日」「二十日」「三十日（みそか）」と数ふれば、指（および）も①（損なふ・る・ぬ・べし）。いとわびし。夜はいも寝ず。二十日の夜の月②（出づ・ぬ・けり）。山の端（は）もなくて、海の中よりぞ出で来る。かやうなるを見てや、昔、安倍（あべ）の仲麻呂（なかまろ）といひける人は、唐土（もろこし）に渡りて帰り来ける時に、船に乗るべき所にて、かの国人（くにびと）、馬のはなむけし、別れ惜しみて、かしこの漢詩（からうた）作りなどし[a]ける。飽（あ）かずやありけむ、二十日の夜の月出づるまでぞありける。その月は、海よりぞ出で[b]ける。これを見てぞ、仲麻呂の主（ぬし）、「わが国に、かかる歌をなむ、神代（かみよ）より神もよん結び、今は上中下（かみなかしも）の人も、かうやうに別れ惜しみ、喜びもあり、悲しびもある時には、詠む」とて、詠めりける歌、

青海（あをうな）ばらふりさけ見れば春日（かすが）なる三笠（みかさ）の山に出でし月かも

とぞ③（詠む・り・けり）。かの国人聞き知るまじく、思ほえたれども、言（こと）の心を、男文字（をとこもじ）に様を書き出だして、ここの言葉伝へたる人に、言ひ知らせ[c]ければ、心をや聞きえたりけむ、いと思ひのほかになむ賞（め）でける。唐土とこの国とは、言（こと）異なるものなれど、月の影は同じ事なるべ[d]ければ、人の心も同じことにやあらむ。さて、今、そのかみを思ひやりて、ある人の詠める歌、

都にて山の端（は）に見し月なれど波より出でて波にこそ入れ

（『土佐日記』）

重要単語チェック

心もとなければ＝じれったいので。
安倍の仲麻呂＝奈良時代の漢詩人。唐に留学、玄宗皇帝に仕え、三十数年後、帰国を試みるが、果たせぬまま長安で没した。
馬のはなむけ＝送別の宴。
よん結び＝お詠みになり。
上中下の人＝身分の高い人も低い人も。
ふりさけ見れば＝遥か遠く仰ぎ見ると。
春日＝奈良市街東方の丘陵地。
かも＝詠嘆の終助詞。
男文字＝漢字。
ここの言葉伝へたる人＝日本語を習得している人。
そのかみ＝その当時。

問一　①〜③の（　）内の語を活用して、適当な形に改めよ。

①（　　）　②（　　）

③（　　）

問二　傍線部a〜dの「ける」「けれ」の中で、異なるものを一つ選び、その記号を答えよ。

（　　）

問三　二重傍線部「三笠の山に出でし月」について、「三笠の山に出でける月」と言ったときとの違いを具体的に説明せよ。

（　　）

問四　本文の内容と一致するものを、次の中から一つ選び、番号を○で囲め。

1　室津の港の山の端から出た月を見て、作者は昔、中国で安倍仲麻呂が詠んだ歌を思い出した。
2　安倍仲麻呂は、送別の宴を開いてくれた中国の人達に、日本の神様の詠んだ歌を送った。
3　仲麻呂は、歌の概略を漢字で書き表し、日本語を理解できる人に歌の意味を説明した。
4　仲麻呂から歌の意味を聞いた中国の人達は、月に対する人の感じ方は同じはずなのに、共感してくれなかった。
5　作者は、仲麻呂の歌を思い出して、仲麻呂が都で見た月が、今、室津の波間から昇ったという歌を詠んだ。

ヒント

問一　助動詞の接続と活用を思い出して組み合わせること。

問二　助動詞の接続をチェックしてみよう。c「けれ」の上の語は、〈使役〉の助動詞「す」である。

問三　助動詞「き」「けり」は、両方とも〈過去〉の助動詞だが「き」には、話者の直接体験というニュアンスがあった。

EXERCISE

第6講 助動詞(2)

基礎学習

I 〈完了・強意〉の助動詞「つ」「ぬ」

【活用】 「つ」は**下二段型**、「ぬ」は**ナ変型**です。「つ」は、下二段活用動詞「棄つ」が、「ぬ」はナ変動詞「往ぬ」が、縮まってできたものかといわれています。

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
つ	て	て	つ	つる	つれ	てよ
ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね

【接続】 「つ」「ぬ」とも**連用形**接続です。

【意味】 「つ」「ぬ」は、ほぼ同じ意味・用法と考えてください。

a 〈完了〉 〜シテシマッタ

起こったこと、終わったことに対して、確かにそれが起こったことだという判断・認識を表します。

b 〈強意〉 キット〜・〜シテシマウ

まだ起こっていないこと、終わっていないことに対して、確かにそれが起こることだという判断・認識を表します。〈強意〉の「つ」「ぬ」は、**推量の表現を伴う**ことが多いので、そのパターンは、覚えておきましょう。

（例）

て／な ＞ む

つ／ぬ ＞ べし

つ／ぬ ＞ らむ

て／な ＞ まし

このような形になったときは〈強意〉です。

▼「つ」「ぬ」の意味が、〈完了〉なのか、〈強意〉なのかは、そのことが終わったことなのか、まだ終わっていないことなのかで判断すると簡明。例えば、「つ」「ぬ」が〈過去〉の助動詞を伴っていれば、当然そのことは終わっているはずなので、〈完了〉と考えるべきであろうし、「つ」「ぬ」が命令形の場合、まだ終わっているはずはないので、明らかに〈強意〉であろう。

問　次の文中から「つ」「ぬ」をそのまま抜き出し、文中での活用形を答えよ。

(1) 花咲きね。（　・　）
(2) 花咲きなむ。（　・　）
(3) 花ぞ咲きぬる。（　・　）
(4) 文書きてよ。（　・　）
(5) 文や書きてまし。（　・　）
(6) 文こそ書きつれ。（　・　）

Ⅱ　〈完了・存続〉の助動詞「たり」「り」

【活用】「たり」「り」ともに**ラ変型**です。両方ともラ変動詞「あり」がほかの語に付いてできたといわれています。

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ
り	ら	り	り	る	れ	れ

【接続】「**たり**」は**連用形接続**、「**り**」は**サ未四已**接続。
「たり」も「り」も、ほかの助動詞を活用すると似た形になることがあり紛らわしいのですが、そのとき、命綱になるのが接続です。特に、「り」は大変紛らわしいので、**四段・サ変のe段音に付く「ら・り・る・れ」➡〈完了・存続〉の「り」**ということをしっかり覚えておいてください。

【意味】「たり」「り」は、ほぼ同じ意味・用法と考えてください。

a〈完了〉～シタ
何かの終わった状態が継続しているという判断・認識を表します。

b〈存続〉～シテイル
ある状態が起こり、継続しているという判断・認識を表します。

問　解答

(1) ね・命令形　(2) な・未然形
(3) ぬる・連体形　(4) てよ・命令形
(5) て・未然形　(6) つれ・已然形

▼「たり」は、「てあり」が縮まってできた語。また、「り」は、四段活用動詞やサ変動詞の連用形に「あり」が付いた表現が縮まってできた語。例えば、四段活用動詞「咲く」の連用形に「あり」が付いてできた「咲きあり」という表現は縮まって「咲けり」となったが、そのときの「り」を助動詞と考えたのである。
　したがって、「り」の接続は、本当は、已然形とも命令形とも決定できない。四段活用動詞またはサ変動詞のe段音に接続するとしか言いようがないのだ。しかし、活用形を決定できないのでは不便なので、便宜的に四段活用の已然形またはサ変動詞の未然形とすることが多いのである。したがって、四段活用の命令形に接続すると覚えても決して間違いではない。

▼同じ〈完了〉でも、「つ」「ぬ」とは異なって、終わった状態が継続している感じなので、訳語も「～シタ」の方がピッタリする。

問 次の文中から「たり」「り」をそのまま抜き出し、文中での活用形を答えよ。

(1) 花ぞ咲ける。（　・　）
(2) 花こそ咲けれ。（　・　）
(3) 花の咲きたる時来よ。（　・　）
(4) 花咲きたりけり。（　・　）

Ⅲ 「たり」「り」と紛らわしくなる助動詞

〈完了〉の「たり」は、後で扱う〈断定〉の「たり」と同じ形になりますが、接続が違いますので、簡単に見分けられます。〈断定〉の「たり」は体言にしか接続しません。

問 次の文中の「たり」の意味を答えよ。

(1) 兄たる人ほかより来。（　）
(2) 尼になりたるなるべし。（　）

「り」は、様々な語と紛らわしくなるやっかいな助動詞です。そのため、文法問題に取り上げられやすい助動詞でもあります。特に、後に扱う〈受身・尊敬・自発・可能〉の助動詞「る」とは紛らわしいので、接続の違いを覚えておきましょう。

四段・ラ変・ナ変 未然形（a段音）＋る

四段已然形（e段音）・サ変未然形（せ）＋り

問 次の文中の傍線部の助動詞について、その終止形とここでの活用形を答えよ。

(1) 文読まる。（　・　）
(2) 文ぞ読める。（　・　）
(3) 文読まれけり。（　・　）
(4) 文こそ読めれ。（　・　）

問 解答

(1) る・連体形　(2) れ・已然形
(3) たる・連体形　(4) たり・連用形

問 解答

(1) 断定　(2) 完了

▼助動詞「る」は、四段活用・ラ変・ナ変動詞にしか接続しない。

問 解答

(1) る・終止形　(2) り・連体形
(3) る・連用形　(4) り・已然形

1 次の文中から、(例)にならって助動詞「つ」「ぬ」「たり」「り」をそのまま抜き出し、ここでの活用形と文法的意味を答えよ。

(例) 風立ちぬ。　（ ぬ ・ 終止形 ・ 完了 ）

(1) 日の経ぬる数を、数ふれば、指も損なはれぬべし。　（　・　・　）（　・　・　）

(2) 二十日の夜の月出でにけり。　（　・　・　）

(3) 今、そのかみを思ひやりて、ある人の詠める歌。　（　・　・　）

(4) 鬼はや一口に食ひてけり。　（　・　・　）

(5) 心地などわづらひて臥したるに、思ふことなげにてあゆみありく人見るこそ、いみじううらやましけれ。　（　・　・　）

2 次の文中の傍線部を、助動詞に注意して現代語訳せよ。

(1) 巳の時ばかりに成りにけり。　（　　）

(2) はや船出して、この浦を去りね。　（　　）

(3) 今は降ろしてよ。　（　　）

(4) はや船に乗れ。日も暮れぬ。　（　　）

1 出典

(1)(2)(3)『土佐日記』（第5講問題演習参照）

(4)『伊勢物語』

(5)『枕草子』（第4講問題演習参照）

ヒント

(1)「べし」は〈推量〉の助動詞。

2 出典

(1)『枕草子』（第4講問題演習参照）

(2)『源氏物語』　(3)『竹取物語』

(4)『伊勢物語』　(5)『古今和歌集』

ヒント

〈完了〉なのか〈強意〉なのかを考えてみよう。

(4)「船に乗れ」ということは、これから船を出すのであろう。まだ、明るいのである。

次は、『平家物語』の一節で、源頼朝（鎌倉殿）の軍勢に敗れ、敵軍に追われた木曽義仲が、腹心の部下今井四郎兼平の勧めによって、粟津の松原へ自害に向かおうとする場面である。

今井四郎ただ一騎、五十騎ばかりが中へ駈け入り、鐙（あぶみ）ふんばり立ち上がり、大音声（だいおんじやう）あげて名乗りけるは、「日ごろは音にも聞きつらむ[a]、今は目にも見給へ。木曽殿の御乳母子（めのとご）、今井四郎兼平、生年（しやうねん）三十にまかりなる。さる者ありとは、鎌倉殿までも①（しろしめす・る・たり）らむぞ。兼平討って見参（げんざん）に入れよ」とて、射残したる八筋の矢をさしつめ引きつめ、さんざんに射る。死生（ししやう）は知らず、やにはに敵（かたき）八騎射落とす。その後打ち物抜いて、あれに馳せあひ、これに馳せあひ、切って回るに、面（おもて）をあはする者ぞなき。分（ぶん）どりあまたしたりけり。ただ、「射とれや」とて、中にとりこめ、雨の降るやうに射けれども、鎧（よろひ）良ければ、うらかかず。あき間を射ねば、手も負はず。

木曽殿はただ一騎、粟津（あはづ）の松原へ駈け給ふが、正月二十一日、入相（いりあひ）ばかりの事なるに、薄氷は張ったりけり。深田ありとも知らずして、馬をざっとうち入れたれば[b]、馬の頭（かしら）も②（見ゆ・ず・けり）。あふれどもあふれども、打てども打てども、はたらかず。今井が行方のおぼつかなさに、ふり仰ぎ給へる[c]内甲（うちかぶと）を、三浦石田次郎為久（みうらのいしだのじらうためひさ）追っかかって、よっぴいて、ひやうふっと射る。痛手（いたで）なれば、まっかうを馬の頭に当ててうっ臥し給へるところに、石田が郎等（らうどう）二人（ににん）落ちあうて、つひに木曽殿の頸（くび）をば取ってんげり。太刀の先に貫き高く差し上げ、大音声をあげて、「日ごろ日本国に聞こえさせ給ひつる木曽殿をば、三浦石田次郎為久が討ち奉ったるぞや」と名乗りければ、今井四郎、戦（いくさ）しけるが、これを聞き、「今は誰をかばはむとてか戦（いくさ）をもすべき。これを見給へ、東国の殿ばら。日本一の剛（かう）の者の自害する手

重要単語チェック

鐙＝馬具の一種。乗る人が足をかけるもの。
乳母子＝乳母の実の子。多くの場合、主人の腹心の部下になる。
しろしめす＝お知りになる。
さしつめ引きつめ＝つがえては引き、つがえては引き。
死生は知らず＝自分の生死を顧みず。
打ち物＝刀。
うらかかず＝裏まで届かない。
入相＝夕暮れ時。
あふる＝鐙で馬の腹を蹴る。
内甲＝甲の内側。
よっぴいて、ひやうふっと＝弓をよく引いて、ひょうと。
まっかう＝甲の前面。
郎等＝家来。
聞こえさせ給ふ＝評判でいらっしゃる。
東国の殿ばら＝関東の殿達。頼朝軍の武士達を指す。

本」とて、太刀の先を口に含み、馬より逆さまに飛び落ち、貫かってぞ失せにける。

（『平家物語』巻九）

問一 ①②の（　）内の語を活用して、適当な形に改めよ。

①（　　　　）　②（　　　　）

問二 傍線部a〜dの助動詞について、その終止形と、ここでの意味と活用形を答えよ。

a（　・　・　）　b（　・　・　）

c（　・　・　）　d（　・　・　）

問三 二重傍線部「木曽殿の頸をば取つてんげり」を現代語訳せよ。ただし、「てんげり」は、「てけり」が変化した表現である。

（　　　　　　　　　　）

問四 本文の内容と一致するものを、次の中から一つ選び、番号を〇で囲め。

1 今井四郎は、勇敢に戦ったが、弓矢をすべて射尽くしてしまい、どうすることもできなくなった。
2 今井四郎の勇猛さを恐れた鎌倉殿の軍勢は、今井を遠巻きにして矢を射かけ、今井に手傷を負わせた。
3 木曽義仲は、粟津の松原へ向かう途中、深い田の中へ敵の馬を落として沈めてしまった。
4 今井四郎は、義仲の行方を心配するあまり、敵に隙を見せて、内甲を射られてしまった。
5 木曽義仲が敵に討たれたことを知った今井四郎は、戦意を失い、自らの太刀によって自害した。

ヒント

問一 ① 助動詞「る」は四段・ナ変・ラ変動詞にのみ接続する。また、終止形接続の助動詞がラ変には連体形に接続するということも思い出しておこう。

② 助動詞「ず」の基本活用・補助活用のどちらを使うかがポイント。

問二 b 接続助詞「ば」は、未然形または已然形に接続する。

c 傍線部直前の「給ふ」は尊敬語で四段活用。

問三 「をば」は、「をは」が転じてできた語。訳すときは、「を」と訳せばよい。

第7講 EXERCISE

助動詞(3)

基礎学習

Ⅰ 〈推量・意志〉の助動詞「む」「むず」

【活用】「む」は四段型、「むず」はサ変型です。

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
む	○	○	む	む	め	○
むず	○	○	むず	むずる	むずれ	○

「む」「むず」は「ん」「んず」と表記されることも多いので注意しましょう。

【接続】「む」「むず」とも**未然形**接続です。

【意味】「む」「むず」は、ほぼ同じ意味と考えてください。

a **〈推量〉** **～ダロウ**
b **〈意志〉** **～シヨウ**
c **〈勧誘〉** **～スルノガヨイ**
d **〈仮定・婉曲〉** **～ナラ、ソノ……・～ノヨウナ……**

※意味の判別は、おおよそ次のように考えるとよいでしょう。

文末用法 ⇒ 主語が一人称 ⇒ 〈意志〉
　　　　　 主語が二人称 ⇒ 〈勧誘〉
　　　　　 主語が三人称 ⇒ 〈推量〉

文中で連体形 ⇒ 〈仮定・婉曲〉

ただし、主語の人称と意味の関係は100%ではありませんので、一つの目安と考え、最後には、前後を訳して文脈上から判断してください。

▼「むず」は「むとす」が縮まってできた語かといわれている。「むず」がサ変型の活用になるのは、そのため。

▼「む」は、本来、〈未確定〉であることを表す語といわれている。つまり、ある事柄がまだ確定しておらず、これから起こる、これから確定するという判断を表しているというのである。この「これから……」という意味の語が、一人称主語の文に用いられると、「私はこれから……する」ということになり、〈意志〉の表明になりやすいのである。また、二人称主語の文に用いられると「あなたはこれから……する」ということになり、〈勧誘〉的な表現になるというわけである。

問 次の文中から「む」「むず」をそのまま抜き出し、ここでの活用形と文法的意味を答えよ。

(1) 我、文書かむ。（　　・　　・　　）
(2) 汝、文こそ書かめ。（　　・　　・　　）
(3) 花ぞ咲かむ。（　　・　　・　　）
(4) 花なむ咲かむずる。（　　・　　・　　）

Ⅱ 〈打消の推量〉の助動詞「じ」

【活用】「じ」は**無変化型**です。

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
じ	○	○	じ	じ	じ	○

【接続】「じ」は**未然形接続**です。

【意味】「じ」は、「む」の打消と覚えましょう。

a 〈打消の推量〉　〜ナイダロウ・〜マイ
b 〈打消の意志〉　〜ナイヨウニシヨウ・〜マイ

※〈打消の勧誘〉や〈打消の婉曲・仮定〉は、見られませんから、「む」の打消といっても、二つしか意味は出てきません。

問 次の文中の「じ」について、その活用形と文法的意味を答えよ。

(1) 花なむ咲かじ。（　　・　　）
(2) 我飲まじ。（　　・　　）

▼〈勧誘〉の「む」は、「こそ……め」という形になりやすい。

問 解答
(1) む・終止形・意志
(2) め・已然形・勧誘
(3) む・連体形・推量
(4) むずる・連体形・推量

問 解答
(1) 連体形・打消の推量
(2) 終止形・打消の意志

Ⅲ 〈現在推量〉の「らむ」と〈過去推量〉の「けむ」

【活用】「らむ」「けむ」ともに**四段型**です。両方とも「む」がもとになっている語だからです。

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
らむ	○	○	らむ	らむ	らめ	○
けむ	○	○	けむ	けむ	けめ	○

【接続】「らむ」は**終止形**接続、「けむ」は**連用形**接続です。

【意味】「らむ」と「けむ」は、両方とも、〈現在〉〈過去〉の時制を表す語に、「む」が接続してできた語と考えられるので、「らむ」と「けむ」の違いは、〈現在〉と〈過去〉だけです。

a **〈現在推量〉（〈過去推量〉）** **～テイルダロウ（～ダッタロウ）**

b **〈現在の原因理由推量〉（〈過去の原因理由推量〉）** **～テイルノダロウ（～タノダロウ）**

c **〈現在の伝聞・婉曲〉（〈過去の伝聞・婉曲〉）** **～テイルヨウナ・～テイルトイウ（～タヨウナ・～タトイウ）**

※このうち、cは、「む」の〈仮定・婉曲〉に対応するものと考えればよいので、

文末用法 ➡ aまたはb
文中で連体形 ➡ c

のように意味を判別しましょう。

問 次の文中の「らむ」「けむ」について、その活用形と文法的意味を答えよ。

(1) 花ぞ咲くらむ。（　・　）
(2) 花や咲きけむ。（　・　）
(3) 花の咲くらむ所を訪ぬ。（　・　）
(4) 花の咲きけむ事を思ふ。（　・　）

▼「らむ」「けむ」は、「らん」「けん」と表記されることも多いので注意。

▼「らむ」は、「あり」に「む」の付いた「あらむ」が縮まった語、「けむ」は、〈過去〉の助動詞「き」の古い形に「む」が付いてできた語といわれている。

▼「らむ」は、話し手の視界に入らない所で現在起こっていることを推量するのが〈現在推量〉、現在目の前で起こっていることについて、原因理由を推量するのが〈現在の原因理由推量〉である。

▼「む」「らむ」「けむ」は、終止形と連体形が同形になるため、係り結びの見落としをしやすい。注意しよう。

問 解答

(1) 連体形・現在推量
(2) 連体形・過去推量
(3) 連体形・現在の伝聞（現在の婉曲）
(4) 連体形・過去の伝聞（過去の婉曲）

1 次の文中から、(例)にならって助動詞「む」「むず」「じ」「らむ」「けむ」をそのまま抜き出し、ここでの活用形と文法的意味を答えよ。

(例) 花咲きぬ。　（ぬ・終止形・完了）

(1) 今井四郎、戦しけるが、これを聞き、「今は誰をかばはむとてか戦をもすべき」　（　・　・　）

(2) これに白からむ所を入れて持て来。　（　・　・　）

(3) かぐや姫を見つけたりけむ竹取の翁よりもめづらしき心地するに……。　（　・　・　）

(4) 法師ばかりうらやましからぬものはあらじ。　（　・　・　）

(5) この月の十五日に、かのもとの国より、迎へに人々まうで来むず。　（　・　・　）

2 次の文中の傍線部を、助動詞に注意して現代語訳せよ。

(1) 日ごろは音にも<u>聞きつらん</u>。　（　）

(2) <u>思はむ</u>子を法師になしたらむこそ、心苦しけれ。　（　）

(3) かかる所に住む人、心に<u>思ひ残すことはあらじかし</u>。　（　）

(4) など、かくはいそぎ給ふ。<u>花を見てこそ帰り給はめ</u>。　（　）

1

出典

(1)『平家物語』（第6講問題演習参照）　(2)『枕草子』　(3)『源氏物語』
(4)『徒然草』　(5)『竹取物語』

ヒント

(2)接続に注意。
(3)文中で連体形の用法である。
(5)「まうで来」は、「やって参る」というほどの意味。

2

出典

(1)『平家物語』（第6講問題演習参照）
(2)『枕草子』　(3)『源氏物語』
(4)『宇津保物語』

ヒント

(1)「つ」をしっかり訳すこと。
(4)帰りを急ぐ使者に向かって、言った言葉。「給ふ」は尊敬語。「帰り給ふ」は「お帰りになる」と訳す。

次は、『伊勢物語』の一節で、帝が愛している女性と恋に落ちてしまった男の話である。

かくかたはにしつつありわたるに、身もいたづらに成りぬ(a)べければ、つひに①（亡ぶ）ぬべしとて、この男、「いかにせむ。わがかかる心やめ給へ」と仏神（ほとけかみ）にも申しけれど、いやまさりにのみおぼえつつ、なほわりなく恋しうのみおぼえければ、陰陽師（おんやうじ）、神巫（かむなぎ）呼びて、恋せじといふ祓（はら）への具してなむ行きける。祓へけるままに、いとど悲しきこと数まさりて、ありしよりけに恋しくのみ②（おぼゆ）ければ、

恋せじ(b)とみたらし河にせしみそぎ神は受けずも成りにけ(c)るかな　（Ⅰ）

といひてなむ③（往（い）ぬ）ける。

この帝は、顔かたち良くおはしまして、仏の御名を、御心に入れて、御声はいと尊くて申し給ふを聞きて、女はいたう泣きけり。「かかる君に仕うまつらで、宿世（すくせ）つたなく悲しきこと。この男にほだされて」とてなむ泣きける。かかるほどに帝聞こしめしつけて、この男をば流しつかはしてけ(d)れば、この女の従姉（いとこ）の御息所（みやすどころ）、女をばまかでさせて、蔵に籠めてしをり給うければ、蔵に籠もりて泣く。

海女（あま）の刈る藻に住む虫のわれからと音をこそ泣かめ(e)世をば④（恨む）じ

と泣きをれば、この男、人の国より夜ごとに来つつ、笛をいとおもしろく吹きて、声はをかしうてぞ、あはれに歌ひける。かかれば、この女は蔵に籠もりながら、それにぞあなるとは聞けど、あひ見るべきにもあらでなむありける。

重要単語チェック

かたはにしつつ＝見苦しくして。この男は、女を慕うあまり、世間の笑い者になっていた。
いたづらになる＝役立たずになる。
わりなく＝どうしようもなく。
陰陽師＝陰陽寮の職員で、占いや地相判断などを行う。
神巫＝神を祭り、神意をうかがう者。
祓への具＝祓への道具。「祓へ」は、神に祈って罪やけがれを清め、災いを除くこと。通常、川原などで行う。
ありしよりけに＝以前より一層。
みたらし河＝神社の近くを流れる川。
みそぎ＝この場合、「祓へ」と同じ意。
宿世つたなく＝宿縁が悪く。
まかづ＝退出する。
しをる＝しかる。せめる。
われから＝「われから」という虫の名と「自分のせい」という意味を掛ける。
音を泣く＝声を上げて泣く。
世＝男との仲。
あなる＝いるようだ。

Ⅱさりともと思ふらむこそ悲しけれあるにもあらぬ身を知らずして
と思ひをり。

（『伊勢物語』六五段）

問一 ①〜④の（　）内の用言を、適当な形に活用して答えよ。

①（　　　　）　②（　　　　）

③（　　　　）　④（　　　　）

問二 傍線部a〜eの助動詞について、その終止形と、ここでの活用形・文法的意味を答えよ。

a（　　・　　・　　）

b（　　・　　・　　）

c（　　・　　・　　）

d（　　・　　・　　）

e（　　・　　・　　）

問三 傍線部Ⅰ「神は受けずも成りにけるかな」とあるが、具体的には、男はどうなったのか、説明せよ。

（　　　　　　　　　　）

問四 傍線部Ⅱ「さりともと思ふらむこそ悲しけれ」とあるが、

(1) 助動詞に注意して現代語訳せよ。

（　　　　　　　　　　）

(2) 「さりとも」の部分の下に言葉を補って、傍線部全体をわかりやすく解釈せよ。

（　　　　　　　　　　）

さりとも＝そうは言っても。
あるにもあらぬ＝生きているとも言えぬ。

ヒント

問一 （　）直後の助動詞の接続を考えること。

問二 d 動詞「つかはす」は四段活用。
e 「こそ……め」は、係り結び。

問四 (1) 「らむ」は文中で連体形の用法。「らむ」の下に何か補って訳そう。
(2) 「さりとも」の下に何か補ってほしい。主語なども補った方が「わかりやすく」なる。